

かぎりなくやさしい花々

野の花々が手足の不自由な私に生命の尊さを教えてくれました



星野富弘

かぎりなく
やさしい
花々

偕成社



著 者／星野富弘（ほしの とみひろ）

1946年、群馬県勢多郡東村に生まれる。

1970年、群馬大学教育学部保健体育科卒業。

高崎市立倉賀野中学校の体育教諭となる。2

か月後、クラブ活動の指導中、誤って墜落。

手足の自由を失う。群馬大学付属病院入院中

より、口に筆をくわえて詩画を書き始める。

1979年5月 第1回詩画展。9月退院。

現在、東村の自宅で療養のかたわら詩画の創作活動をしている。

著書「愛、深き淵より」「風の旅」（立風書房）

かぎりなく やさしい^{はなばな}花々

1986年6月 1刷

著 者 星野富弘

1986年7月 5刷

発行者 今村 廣

発行所 偕^{かい}成^{せい}社^{しゃ}

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5

編集 ☎03-260-3229 販売 ☎03-260-3221

ISBN4-03-634120-0

NDC 916 168p. 22cm

印刷所 新興印刷製本株式会社

製本所 文勇堂製本工業株式会社

©Tomihiko HOSHINO 1986

Published by KAISEI-SHA. Printed in Japan.

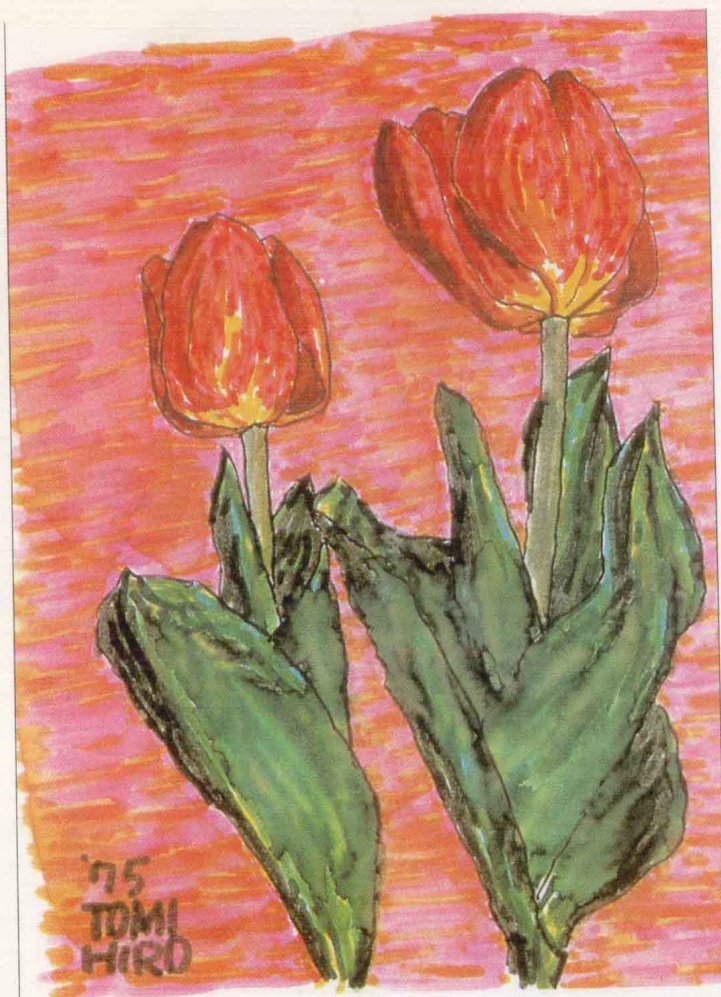
＊乱丁本・落丁本はおとりかえいたします。

かぎりなく
やさしい
花々

星野富弘

偕成社

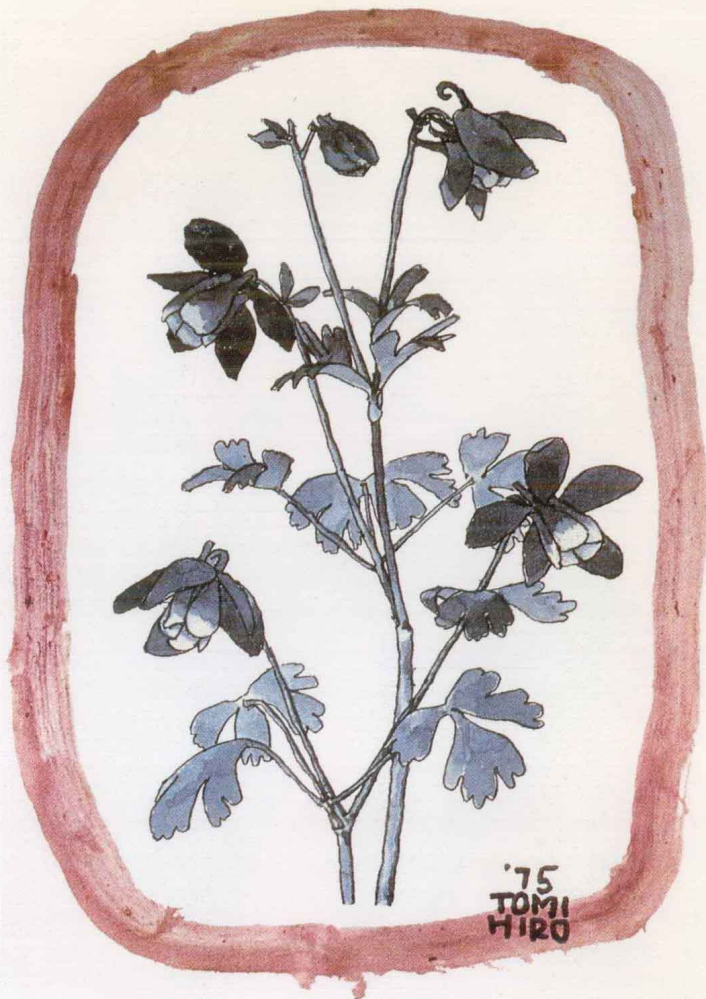




チューリップ

初めてクレヨンで
描いてもらった時
壁紙の板に
やたらとチューリップの
絵をかいた

今、私は
口に筆をくわえ
やはりチューリップをか
いている



'75
TOMI
HIRO

オダマキ

花だって
ほめてあげた
ほうが
元気に
なるんだ
そうですね
だけれど
そんなことを
いったら
④心に出したら
花に
絵を見られるのが
こわくなった



キ
ク

小林さんが
花を持って来て
くれるようになって
もう六年になる
小林さんの作った花は
雑草のように
たくましく
時々虫がはっている
私はそういう花が
好きだ
花を定規で来た
新聞紙に
小林さんの指のあとが
残っている



だれだろ
こんな固い実を
割ったのは

だれだろ

草や花や

木の实や

穴や鳥や魚に

色をぬったのは

私は

ふしぎな

ところに

うまれた



スカシユリ

顔の横に
花をあげて
見つけていたら
私は花よりも
小さくなって
しまった



タンポポ

いっしょにか
 きみたちが （いっしょに）
 風にかれて （いっしょに）
 ただ一つのものを （いっしょに）
 旅する （いっしょに）
 うれしくて （いっしょに）
 人間だ （いっしょに）
 ただ一つ
 私を （いっしょに）
 宝が （いっしょに）



ちいさから 踏まれるの
 弱から 折れないの
 なれるも
 その時
 ひまわり
 しほり
 またはちまたなる



ドクダミ

知らなかつたよ
 こんちんにきれいだ
 すぐそばにいて
 知らなかつたよ
 なんて

もくじ

はじめに	14
とつぜんの悲しみ	16
体育の先生	16
腕があるんだろうか	21
父母の顔	25
死にやしないよ	29
文字を書くよろこび	39
はげましの帽子	39
文字をつづる	49
やくそく	51

母の歌 はは うた

わたしのふるさと

先輩の祈り せんぱい いの

聖書 せいしよ

心の虹 こころ にじ

たのしみに待つ人 ま

桑畑の歌 くわばた うた

罪ぶかくよわい人間 つみ にんげん

母と見る虹 はは み にじ

花とともに生きる はな い

車椅子にのって くるまい す

ランの花への思い はな おも

金色の廊下 きんいろ ろうか

108

102

99

99

94

90

79

77

77

65

63

59

54

花にかかせてもらおう……	113
わたしの電動車椅子……	117
はじめての展覧会……	122
病院を去る日……	131
めぐりくる季節に……	139
秋のふるさと……	139
かがやく季節……	149
十字架の花……	153
花にかこまれて……	158
あとがき……	164

はじめに

ここに、古いスケッチブックが七さつあります。

ふだんは、戸^とだなの奥^{おく}にしまっているのですが、一年に一度^{いちど}くらい出して、なつかしい思い^{おも}で見えています。

一さつめは、シルバー^{ひようし}仮面^{かめん}が怪獣^{かいじゆう}とたたかっている表紙^{ひようし}のものです。あとの六さつも、表紙^{ひようし}がちがったり、かたちも大きさもまちまちです。どれも角^{かど}がおりて、紙^{かみ}もうす茶色^{ちやいろ}になってしまった、古いスケッチブックです。

でも、この古い七さつのスケッチブックは、どんなに高価^{こうか}なものよりも、わたしのたいせつな宝物^{たからもの}なのです。

いまから十四年くらいまえの、一九七二年十二月、わたしは、このシルバー仮面^{かめん}の最初^{さいしよ}のページに、ひとつの文字^{もじ}を書^かきました。

